北海道言語文化研究　　北海道言語研究会
No. 18, 47-72, 2020.

現代ドイツの囲碁事情（2）

杉浦　康則

The Current Situation of Go in Germany (2)

Yasunori SUGIURA

要旨：『ヒカルの碁』は日本においてのみならず、ドイツにおいても囲碁普及、とりわけ若者たちへの囲碁普及に大きな役割を果たした。その来独前後の頃、ドイツ碁連盟による複数の活動の中に『ヒカルの碁』との関連が見出され、若者たちに向けた新たな活動が次第に活発に行われるようになった。その結果、青少年たちを中心にドイツ碁連盟構成員数は増加し、ドイツ囲碁界に好況が訪れた。そして、『ヒカルの碁』によって生み出されたこの機運は、程なくして開始された囲碁のブンデスリーガの推進力となっていたと捉えることができる。

キーワード：囲碁　ドイツ碁連盟　ヒカルの碁

1. はじめに

囲碁を趣味とする日本人の中に、『ヒカルの碁』を知らない者などほとんどいないだろう。『ヒカルの碁』は、『週刊少年ジャンプ』において 1999 年 2・3 合併号から 2003 年 33 号にかけて連載された、ほったゆみと小畑健によるマンガである。このマンガが当時、囲碁ブームを巻き起こしたことはあまりにもよく知られており、このことは日本棋院発行の『碁ワールド』における記事からも確認することができる：

> 「ヒカルの碁」は、平成 10 年の年末に週刊少年ジャンプで産声を上げた。[…]
> 半年、一年と連載が続いて来た頃には、発行部数四百万部ともいわれる少年ジャンプの効果は絶大で、子ども達の間にどんどん囲碁が浸透して行った。碁会所や日本棋院の支部に子ども達が訪ねる話しが伝わって来るようになったし、日本棋院にも面白い電話が掛かって来るようになった。[…]
> 最近、よく耳にするのは各地で子どもの囲碁教室が急増していることである。碁会所、日本棋院支部、小学校、中学校等々、場所、形態を問わず多くは、というかほとんどが囲碁愛好家のボランティアに支えられているのは、大変有難いことだし、子ども達にとっても嬉しいことである。どこもここも、日増しに参加者が増えているようで、この勢

いを大切にしたいものだ。[1]

この囲碁ブームの到来は数値として見て取ることもできる。上述の記事には日本棋院主催の少年少女囲碁大会及び高校囲碁選手権大会の地方予選参加者数の推移も掲載されており、次表の①と②はその数値である。1999 年から次第に参加者が増えていることを確認することができる[2]。また、表の③には同時期の日本の囲碁人口を記載したが、ここからは全体として続いていた囲碁人口の減少に、当時、歯止めがかかったことを見て取ることができる[3]。

	①少年少女囲碁大会	②高校囲碁選手権大会	③囲碁参加人口
1993 年	1711	2553	5300000
1994 年	1778	2461	5600000
1995 年	1889	2463	5400000
1996 年	1973	2574	4400000
1997 年	1933	2618	5000000
1998 年	1853	2685	4000000
1999 年	1920	3006	3900000
2000 年	2116	3918	4600000
2001 年	2314	4216	4500000

私は本稿に先立つ「現代ドイツの囲碁事情（1)」において、2004 年に開始されたインターネット対局による「碁ブンデスリーガ」（Go-Bundesliga）の初年度の展開を示した[4]。そしてそこでは、当時のドイツ囲碁界に好況をもたらしたきっかけは何であったのかという問いが残され、ブンデスリーガ開幕から数年を遡った時期のドイツ囲碁界の状況に焦点を当て、この問いに対する回答を導き出すことが課題となった。ただし、ブンデスリーガ初年度の開催時期から、この当時のドイツ囲碁界の好況に『ヒカルの碁』が一役買っていたことを容易に予想することができるだろう。そして事実、『ヒカルの碁』はドイツにおける囲碁普及、とりわけ若者たちへの囲碁普及に大きな役割を果たした。この作品がドイツ囲碁界にどれほどのインパクトを与えたのかは、当時の『ドイツ碁新聞』（Deutsche Go-Zeitung）に掲載された、学校での囲碁普及活動に関する記事からも推し量ることができる：

5 月の初めからヴィリー・ブラント総合学校において、囲碁の対局が行われている。[…] 約 50 人の生徒たちが碁盤と碁石を買い、第 1 回囲碁大会のためだけでも既に、第 5 学

[1] 酒巻忠雄：「ヒカルの碁」ブームとそのゆくえ［日本棋院『月刊碁ワールド』第 49 巻第 5 号，2002，128－131 頁］128，130 頁。
[2] 同上，128－129 頁。
[3] 財団法人自由時間デザイン協会：レジャー白書 2002（文栄社）2002，44 頁。
[4] 杉浦康則：現代ドイツの囲碁事情（1）［『独語独文学研究年報』第 45 号，2019 年，1－25 頁］。

年から第 11 学年の 45 人のプレーヤーたちが申し込んだ。
私はアニメ『ヒカルの碁』を観せることを、5 月の初めに 2 つの小さな掲示で告知した。約 30 人の生徒たちが物理の小講義室で第 1 話を観た。続く数週間に起こったことが信じられなかった。月、木、金曜の昼休みに、夢中になった 40 から 60 人が映画上映を訪れた。［…］1 週間後、私はコピーした 9 路盤と碁石のミニセット約 20 組を［…］1 ユーロで提供した。数分で全てが品切れとなった。［…］道具の調達は私の最大の問題だった。［…］
今のところ私は、私たちの学校内でのチームマイスターシャフトの実践を計画している。既に 3 人 1 組の 15 チームが申し込みをした。［…］ヴィリー・ブラント総合学校の約 7 人の囲碁プレーヤーたちがカストロプ＝ラウクセルの対局の夕べを訪れ、そこでも力強く鍛えられている。[5]

『ドイツ碁新聞』2002 年第 3 号に掲載されたこの記事 1 つを読んだだけでも、『ヒカルの碁』が及ぼした影響の大きさを確認することができる。しかし、ドイツ囲碁界に好況が訪れるきっかけは『ヒカルの碁』の到来のみだったのだろうか。それ以前にはドイツの囲碁発展のための活動は行われていなかったのだろうか。あるいは『ヒカルの碁』の到来後、どのような活動が生み出されたのだろうか。本稿ではこれらの点に焦点を当て、21 世紀初頭のドイツ囲碁界の様相を示し、これをドイツ現代囲碁史研究の 2 手目としたい。

2. 『ヒカルの碁』の来独前

本章では『ヒカルの碁』がドイツに到来する以前に、ドイツ囲碁界でどのような活動が行われていたのかを概観する。ただし「『ヒカルの碁』がドイツに到来する以前」とは言っても、「ドイツ囲碁史研究」[6]で扱われるような過去にまで目を向けるのではなく、ここでは 21 世紀最初の年にまで遡り、『ドイツ碁新聞』や『通達』（Rundschreiben）[7]から、当時のドイツ囲

[5] Horst Timm: Go-Mania an der Willy-Brandt-Gesamtschule in Castrop-Rauxel. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft3, S.6-7.　かつてドイツ碁連盟副会長を務めていたホルスト・ティム（Horst Timm）によるこの活動は、学校の同僚たちからは次のように反感を買った。「その他の、無視するべき問題は、教室内で碁石が飛び交うだろう、あるいは生徒たちが授業中に囲碁を打つだろうという同僚たちの苦情である。教師用情報掲示板での告知にもかかわらず、『ヒカルの碁』を観たのは、これまで 2 人の同僚のみである。それどころか、生徒たちが新鮮な空気の中で過ごすことを、私が妨げるだろうという警告があった。」Vgl. Ebd.　また、『ドイツ碁新聞』2000 年第 11＋12 号において、2001 年初めにティムが連盟副会長を辞任したことが報告されている。Vgl. Anonymus: DGoB-Personalien. In: Deutsche Go-Zeitung (2000), Heft11＋12, S.3.　なお、ティムが上映に用いたアニメ版の『ヒカルの碁』はオリジナルの日本語音声のものであったが、英語字幕及びそのドイツ語意訳と共に上映された。Vgl. Timm: Go-Mania an der Willy-Brandt-Gesamtschule in Castrop-Rauxel, S.6.
[6] 杉浦康則：ドイツ囲碁史研究（1）［『独語独文学研究年報』第 44 号，2018 年，127－142 頁］。
[7] 2000 年 10 月から 2003 年 9 月までのドイツ碁連盟の活動等を月毎に報告した『通達』が、連盟ホームページに掲載されている。2003 年 9 月の『通達』は『ドイツ碁連盟幹部通達』（DGoB-Vorstandsrundschreiben）としても連盟ホームページ内のフォーラム上に掲載され、その後はこのフォーラム上の『幹部通達』において連盟の活動等が報告されている。Vgl. http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm / http://www.dgob.de/yabbse/index.

碁界の動向を探ることにする。

『ドイツ碁新聞』2001 年第 1 号の「会長挨拶」において、「ドイツ碁連盟」（Deutscher Go-Bund）会長マルティン・シュティアスニー（Martin Stiassny）はこの年の重点活動の 1 つとして「学校及び大学での囲碁普及」を掲げた[8]。彼は続く記事「構成員数の発展」において、連盟幹部がこの決定に至った理由を次のように述べている：

> ドイツ碁連盟の構成員は州連盟であり、個々の囲碁プレーヤーたちではない。[…]
> 州連盟の全構成員の合計は 1623 人である（2001 年 1 月 1 日の状況）。これは 1 年前よりも 43 人多い。しかしこれは、一見思われるほどは良好ではない。なぜならこの成長はほぼハンブルク州連盟のみに見られるものであり、他の州連盟において、構成員数はほとんど変わらなかったからである。何がハンブルクでは異なるのか。非常に簡潔な回答は次の通り：とりわけシュテファン・ブーディヒとトーマス・ノーアが囲碁を学校で普及させるために数年前から継続的に尽力している。[…]
> 10 年間を見ると、構成員数はほぼ変わらなかった。しかし生徒たち及び学生たちのパーセンテージは年々低くなった。これは［…］ドイツの囲碁の全体的発展のためには憂慮すべきことである。[…]
> したがって私たちの全テーマは、特に学校と大学で囲碁を促進することでなくてはならない。[9]

この記事において、シュティアスニーはさらに「『学校における囲碁』専門事務局の設置がこの方向への最初の小さな一歩であってほしい」[10]と述べている。つまり、学校での囲碁促進を目指す「専門事務局」（Fachsekretariat）がここに創設されることとなったのである[11]。この専門事務局の創設については『通達 2001 年 2 月』においても言及され、事務局の目的は「学校での囲碁に関する経験を、地域の枠を超えて管理し、興味を抱く教員たちを学校での囲碁授業の際に支援すること」[12]とされている。そして『通達 2001 年 5 月』においては、この専

---

php?topic=42.0, DGoB-Vorstandsrundschreiben 09/2003, DGoB-Vorstand, 20.09.2003 17:49.　また、フォーラムへの投稿を文献として注に挙げる際の形式については、次の文献を参照。杉浦（2018），128 頁。

[8] Martin Stiassny: Grußwort des Präsidenten. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft1, S.3.

[9] Martin Stiassny: Mitgliederentwicklung. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft1, S.3-4.

[10] Ebd., S.4.

[11] シュティアスニーはこの記事に続けて「『学校における囲碁』専門事務局」という記事を掲載し、次のように述べている。「ドイツ碁連盟はこの専門事務局を設置したい。求められる人物は、このテーマにおいて積極的に参加する意志のある皆のための、第 1 の相談相手でなくてはならない。今のところ重要なのは、これまでに提出されている資料（先生たちのリスト、教材、実施された活動についての体験報告、促進の可能性...）をアクチュアルなものに替え、既に知られている『学校囲碁活動家たち』と連絡を取ることである。[…] さらに、『学校における囲碁』のテーマについて、ドイツ碁連盟あるいはウェブフォーラムに届く問い合わせに返答しなくてはならないだろう。」Vgl. Martin Stiassny: Fachsekretariat „Go an Schulen“ In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft1, S.4.　また、専門事務局については次の文献を参照。杉浦（2019），3 頁。

[12] http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Februar 2001.

門事務局の局長にトーマス・ノーア（Thomas Nohr）が就任したことが告げられた[13]。

学校での囲碁普及が目標として掲げられ、そのための専門事務局が創設されたこの年、若者たちに囲碁を広めるための活動は実際に本格化し、その後、『ドイツ碁新聞』に多くの活動報告が掲載されていった。様々な活動が行われたが、ここでは例として、テレビでの囲碁紹介の活動を最初に挙げたい。「多くの人々、とりわけ子供たちのもとに到達するためには、最も人気のある子供番組に現れるより良い方法はない」という理由から、「マウスの番組」（Die Sendung mit der Maus）[14]で囲碁が紹介されることが『ドイツ碁新聞』2001 年第 3 号において報告された。この報告によると、番組作成のために、テレビカメラの前で囲碁を打つことができる子供が求められ、ピエール＝アラン・シャモ（Pierre-Alain Chamot）の 9 歳の息子フロリアン（Florian）がその任務を負うことになった。フロリアンはテレビカメラの前で囲碁のルールを説明し、その後、9 路盤で実例としての対局が行われた[15]。同記事にはさらに次のように述べられている：

> おそらくこの秋、この番組はテレビ放送されるだろう。そこから新たな囲碁プレーヤーたちの激しい波を期待するべきかどうかは疑わしい。しかし 2、3 千人の子供たちが『囲碁』の名を耳にし、最初の視覚的印象、そして対局の経過の漠然とした見当を獲得するなら、きっとそれは既に成功である。そしてもしどこかの学校で囲碁コースが提供されるなら、「私はそれを知っている、私はそれをもうテレビで見た！」という発言と共に 2、3 人多くの子供たちがひょっとするとそこに来るかもしれない。[16]

この番組の放送日時の確定は『通達 2002 年 9 月』においてようやく報告され、マウスは 9 月 8 日の 11 時 30 分から番組内で囲碁を学ぶことになった。同『通達』においては、この日時に放送を「観ることができない者、そしてビデオレコーダーを所有していない者も再放送の 1 つを観ることができる」という予告と共に、9 月 8 日から 14 日までの再放送の日時一覧が掲載された[17]。

この事務局創設のアイデア自体は『通達 2000 年 12 月』において、既に述べられている。Vgl. http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Dezember 2000.

[13] http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Mai 2001.

[14] この番組は、日本でも『だいすき！マウス』というタイトルで 2005、6 年に NHK 教育テレビにおいて放送された。

[15] Pierre-Alain Chamot: Die Maus lernt Go spielen. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft3, S.9-10.

[16] Ebd., S.10. 『通達 2001 年 6 月』には次のように報告されている。「西部ドイツ放送が囲碁についての番組を製作した。それはいつかマウスの番組において放送される。放送期日はまだ未定であるが、適時にドイツ碁連盟のインターネットサイトにおいて公表される。」Vgl. http://www.dgob.de/ index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Juni 2001.

[17] http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben September 2002. この番組は、現在でも次のサイトで見ることができる。https://www.wdrmaus.de/filme/sachgeschichten/go.php5 また、エッセンのボードゲーム見本市において、「私はこれをマウスで見た」と言って囲碁ブースにやってくる人々がいたことを、アンドレアス・フェッケ（Andreas Fecke）が『ドイツ碁新聞』2002 年第 5 号において報告している。Vgl. Andreas Fecke: Spielemesse Essen. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft5, S.3.

テレビ番組の放送による囲碁促進だけでなく、『ドイツ碁新聞』を用いた促進も行われた。『通達 2001 年 6 月』によると、興味を抱く青少年たちに『ドイツ碁新聞』を期間限定で無料配布するいうノーアの提案が「代表者会議」(Delegiertenversammlung) で議決された[18]。このプロジェクトは「子供たちへの宣伝活動新聞」(Kinder-Werbe-Aktion-Zeitung、略称 KWAZ) と呼ばれ、『ドイツ碁新聞』2001 年第 3 号にも次のように述べられている：

> 特定の条件の下、子供たちが『ドイツ碁新聞』を期限付きで、しかし無料で自宅に送付してもらえるということが、2001 年 6 月 16 日のダームシュタットでの代表者会議において決議された。
> 大枠の条件：
> 1. 発行部数は［…］増やされない。したがって、この活動のために用いることができるのは約 120 部である。
> 2. この活動は 16 歳未満の生徒たちをねらいとしている。
> 3. 学校囲碁専門事務局長が手続きを進行させる。［…］
> 6. この活動の期限は 3 年間である。
> 興味を抱く個々の囲碁グループ指導者がやること：
> 1. 入門の催しの終了時、あるいは学校囲碁部の設立後、［…］先生は KWAZ を受け取るべき子供たちのリストを作成する。
> 2. このリストは［…］メールあるいは郵便によって学校囲碁専門事務局に送られる。在庫がある限り、この専門事務局は新聞の送付を指示する。[19]

このようにして子供たちの囲碁参加を後押しする活動に並び、「プロジェクト週間」(Projektwoche) での囲碁コースの提供という活動も行われていた[20]。『ドイツ碁新聞』2001 年第 5 号には、ザクセンのギムナジウムでのプロジェクト週間に関する記事が掲載されている。この記事によると 2001 年 9 月 10 日から 14 日まで、記事の著者イェンス・フレーリッヒ (Jens Fröhlich) がギムナジウムで囲碁コースを提供し、初日には第 7 学年から第 10 学年までの生徒たち 23 人が姿を現した。フレーリッヒは以前、ドイツの学校で囲碁を教える重野由紀とハーラルト・クロル (Harald Kroll)[21]のビデオを見ていたため、このようなコースを行

---

[18] http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Juni 2001. 代表者会議については次の文献を参照。杉浦 (2019)，3 頁。

[19] Thomas Nohr: Schulgo & KWAZ. Kinder-Werbe-Aktion-Zeitung. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft3, S.11.

[20] プロジェクト週間とは、「プロジェクト法」(Projektlernen) の特殊形態であり、1970 年代から総合学校を中心に取り組まれてきた。「1970 年代以降ゲザムトシューレを中心に実践されていたプロジェクト週間では、その期間中、従来の学校の授業がとりやめられ、代わりに教師と生徒たちが選択したテーマについて、学校内外で調査や体験をしたり、議論や発表をするなどの新たな活動が行われた。［…］今日のプロジェクト週間の理論や実践には［…］多様な形態が存在する。」Vgl. 渡邉眞依子：ドイツにおけるプロジェクト週間 (Projektwoche) に関する一考察［『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部，教育人間科学関連領域，第 56 号，2007 年，143－151 頁］。

[21] Jens Fröhlich: Erste Projektwoche in Sachsen. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft5, S.4-5, hier S.4.

う方法を心得ており、最初に東アジアの文化や囲碁の歴史等の説明が行われた後、囲碁のルールが説明され、9 路盤での対局が開始された。3 日目にはコンピュータープログラムとの対局も行われ、最終日には締めくくりの大会が開催された。コース終了後、「囲碁部の設立が準備されている」と報告されているので、このイベントは成功を収めたと言えるだろう[22]。

本章において概観してきたように、2001 年は子供たちや青少年たちに囲碁を広めるための活動に重点を置くことが宣言され、それが実践された年であった。『ドイツ碁新聞』2001 年第 6 号においてシュティアスニーはこの 1 年を振り返り、生徒たちの囲碁グループの数が明確に増加した点や、150 人以上の生徒たちが参加したハンブルクの囲碁大会が 2001 年のドイツの囲碁大会で最大規模のものであった点について言及している。ただし連盟構成員数に変化がなく、約 1600 にとどまっていることは彼にとって不満であった。「開始されたドイツ碁連盟及び州連盟の活動は、これまでのところ結果をわずかしか生み出していない」というのが当時の彼の判断であった[23]。

この状況は『ヒカルの碁』の来独後、どのように変化していくのか。次章以降ではこの点に注目しながらドイツ碁連盟の活動を見ていきたい。

3. 『ヒカルの碁』とアニメコンベンション

本稿冒頭でも述べた通り、『ヒカルの碁』が日本の囲碁界に大きな作用をもたらしたことは広く知られている。このマンガが連載された当時の、そしてそれ以前の日本における囲碁の状況については、2005 年に出版されたドイツの囲碁入門書においても次のように言及されている：

> 中国及び韓国において囲碁がますます多くの人々を魅了したのに対して、日本の囲碁プレーヤーたちの数は何年も前から減少していた。囲碁は日本の青少年たちからは、過去の時代の遺物、老人たちのためのゲームとみなされていた。[…] そして囲碁界には生き残るために必要な次世代が欠けていた。しかし、この状況は世紀転換期に変化した：子供たち及び青少年たちのための囲碁クラスが再び満員となり、囲碁クラブでは若者たちがひしめき合った。
>
> この好況の原因は『ヒカルの碁』という日本のコミック、つまりマンガであった！原作ほったゆみ、漫画小畑健のこの作品は、1998 年末、雑誌『少年ジャンプ』にまず登場し、間もなく大成功を収めたので、2001 年から 2003 年まで、日本のテレビにおいてアニメシリーズも放送された。それにより『ヒカルの碁』の知名度は […] さらに上昇し、日

重野とクロルの活動については本稿末を参照。

[22] Ebd., S.4-5. 『ドイツ碁新聞』2001 年第 3 号には、ヴィリンゲンで実施されたプロジェクト週間についての報告が掲載されている。この報告からは、2 年前にも同様の囲碁コースが行われたことがわかる。Vgl. Olaf Wiemann: Go - Projektwoche Willingen. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft3, S.7-8.

[23] Martin Stiassny: Rückblick 2001. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft6, S.3-4.

本の若者たちを突き抜けるこの勝利の行進を止めることはもはやできなかった。[24]

日本においてこのように、若者たちに囲碁への興味を抱かせるという成果をもたらした『ヒカルの碁』は、その後ドイツに進出していくことになり、既に『通達 2001 年 7／8 月』には次のように述べられている：

クラウス・ブルームベルクの提案後、『囲碁マンガ』のテーマが現在話題となっている。ハンブルクのカールッソン出版へのコンタクトを構築しようと、シュテッフィ・ヘープザッカーが現在試みている。この出版社は日本の囲碁コミックの翻訳を計画している。[25]

しかしこの計画は連盟の期待通りには進まず、『通達 2002 年 1 月』には「マンガ『ヒカルの碁』のドイツ語版の出版は、残念ながら見通しが暗い」という報告が掲載された[26]。その後、公式にドイツに『ヒカルの碁』が到来した時期については、上述の入門書で次のように言及されている：

『ヒカルの碁』は 2003 年秋にドイツにやってきて、まずカールセン出版によって刊行されるマンガ作品集『バンザイ！』に登場した。2004 年から、同様にカールセン出版の下で、個々の話が単行本シリーズにおいて刊行されている。
ドイツの青少年たちはアジアの同世代の人々よりも囲碁についてわずかしか知らないが、日本での作用と同じ作用がこの国でもたらされている！囲碁の集いにはこれまでほぼ大人たちのみが訪れていたのだが、そうこうするうちに参加者たちの平均年齢が急速に下がっている。そして、青少年たちによって青少年たちのために開催される集いがもはや珍しくない。[27]

---

[24] Jörg Digulla / Alfred Ebert / Andreas Fecke / Horst Timm: Das Go-Spiel. Eine Einführung in das asiatische Brettspiel. Hamburg (Hebsacker) 2005. S.44.

[25] http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Juli/August 2001. クラウス・ブルームベルク（Klaus Blumberg）は「構成員データバンク専門事務局」（Fachsekretariat Mitgliederdatenbank）の局長を務めた人物で、『通達 2001 年 6 月』には局長への就任が、『通達 2002 年 11 月』にはこの事務局の解体が報告されている。Vgl. http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Juni 2001. / http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben November 2002. シュテッフィ・ヘープザッカー（Steffi Hebsacker）はハンブルク州連盟会長であり、2002 年にヘープザッカー出版（Hebsacker Verlag）を創設した。また、「カールッソン」（Carlsson）はおそらく「カールセン」（Carlsen）の誤植である。

[26] http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Januar 2002.

[27] Digulla / Ebert / Fecke / Timm, S.45. 『ヒカルの碁』の連載開始について、『ドイツ碁新聞』2003 年第 6 号においては次のように報告された。「10 月半ば、カールセン出版の月刊ドイツマンガ雑誌『バンザイ！』第 25 号において、マンガ『ヒカルの碁』がスタートした。［…］オーストリアとスイスにおいても販売される『バンザイ！』は発行部数が 100000 をはるかに超える。このことが数か月でこれらの国々の囲碁界に何を意味することになるのか、大いに期待してよい。」Vgl. Christoph Gerlach: Hikaru no Go in der „Banzai!“. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft6, S.3.

このように『ヒカルの碁』ブームは日本国内にとどまらず、公式には 2003 年秋以降、ドイツ囲碁界においても引き起こされることとなった。ただし、上述の『通達』のみならず『ドイツ碁新聞』における複数の記事から、このブームが 2003 年秋という『ヒカルの碁』の公式来独より以前に着実に準備されていたことを確認することができる。2002 年 4 月 19 日、ハノーファーでドイツ碁連盟の代表者会議が行われ、『ドイツ碁新聞』2002 年第 2 号において、シュティアスニーが次のような会議の報告をしている：

> クリストーフ・ゲルラッハによって集中的に準備され、提示された『ヒカルの碁』プロジェクトは大多数をもって議決された。クリストーフはドイツ碁連盟から全権を与えられた者として、ドイツ碁連盟幹部と代表者たちの後援を十分に受けながら、極東で大きな成果を上げたこの囲碁マンガの翻訳と刊行を出版社の下で達成するよう尽力するだろう。[…] これまで手の届かなかった地域の人々に囲碁を知らしめる、おそらく二度とないチャンスを私たちがここで手にしているという意見で、代表者たちは一致していた。[28]

もちろんこの当時、『ヒカルの碁』がドイツでも成果を生み出すかどうかはまだ不明であった。シュティアスニーもこの記事において「このやり方で私たちが囲碁ブームを達成するかどうかは、数年後にようやく示されるだろう」と述べている。しかし、「少なくとも『ヒカルの碁』で囲碁を普及させる試みを行わないのはひどく軽率だろう」という、代表者会議における大多数の意見を背景に、このプロジェクトは力強く推進されることとなった[29]。

ハノーファーでの代表者会議に先立ち 2002 年 3 月に行われた、ハンブルクでの「アニメマラソン」（Anime-Marathon）についての記事からは、『ヒカルの碁』が既にドイツのマンガ／アニメファンたちの間で認知され始めていたことを確認することができる。この記事には、マンガ／アニメファンたちのグループと囲碁グループのつながりが生み出された経緯が述べられており、興味深い：

> ハノーファーの囲碁グループは既に少し前から、マンガファンたちのグループとのコンタクトがある。彼らはなんとしても囲碁を学ぶつもりだった。それはなぜか。少し前から日本で『ヒカルの碁』という連載マンガが刊行されているのである。[…] 今のところ『ヒカルの碁』は英語翻訳でインターネットにおいてのみ見られる。ドイツにはいくつかのマンガ及びアニメファングループがあり、そのうちの 1 つである『アニメの友達』

[28] Martin Stiassny: Delegiertenversammlung Hannover (Teil 1). In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft2, S.4. 後に「ヒカルの碁専門事務局」（Fachsekretariat Hikaru no Go）が設けられ、ゲルラッハがその局長に就任した。Vgl. http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Februar 2003.
[29] Ebd.

が週末の 2002 年 3 月 22 日から 24 日、ハンブルクで『アニメマラソン』を組織した。[30]

このイベントにおいては様々な種類のアニメが中断されることなく映写された。また、マンガショップ、コンピューターゲームのための空間が設置され、さらに様々なワークショップや講演も実施された。そして、「ハノーファーのクリストーフ・ゲルラッハによる指導の下、『囲碁』もワークショップに現れた」[31]のであった：

> 私たちがまだ陳列を完成させていないうちに、既に最初の客たちが来て、彼らはすぐに 9 路盤に向かい、陽気にがむしゃらに対局した。繰り返し、たいてい小さなグループで興味を抱く者たちが来た。そのうちの多くはマンガの主要人物として仮装していた。何人かはまだ対局のルールを全く知らなかったが、多くの人たちは囲碁の概念をいくらか知っており、それどころかマンガにおける上手なルール説明のおかげで、既に少し対局することができた。この空間はほぼ常にいっぱいで、私たちにはやることがたくさんあった。[32]

このアニメマラソンでのワークショップが、アニメコンベンションにおけるドイツ碁連盟のワークショップの最初であった[33]。『ヒカルの碁』によってドイツにも囲碁ブームが訪れるかどうかはまだ不明という状況の中、連盟のアニメコンベンションとのつながりは囲碁普及のための確かな一歩となったはずである。なぜなら、コンベンションを訪れる非常に多くの客たちが囲碁のワークショップを目にすることになったからである[34]。この後、連盟は様々

---

[30] Steffi Hebsacker: Anime-Marathon in Hamburg-Bergedorf. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft2, S.5.
[31] Ebd.
[32] Ebd.　この記事においては「マンガにおける上手なルール説明」と述べられているが、正しくは「アニメにおける上手なルール説明」であると思われる。アニメ『ヒカルの碁』には、本編の後に「梅沢由香里の『GOGO 囲碁』」という囲碁のルール説明等を行うコーナーが付随されていた。インターネットにおいて英語翻訳で見ることができた『ヒカルの碁』でも、このコーナーが省略されずに放送されていたのだと思われる。また、吉原（旧姓梅沢）由香里は日本棋院所属の女流棋士で、マンガ『ヒカルの碁』の監修を務めた。
[33] 後にゲルラッハが次のように述べている。「ドイツ碁連盟はマンガ／アニメコンベンションでの囲碁の提供を 2002 年 2 月 23 日の『アニメマラソン』において開始した。[…] このコンベンション、そしてとりわけまた『アニメの友達』（アニメファンクラブ）内の私たちの代弁者たちが、ドイツ碁連盟にいくつかの扉を開き、短期間のうちに、コンベンションは『囲碁のワークショップ』なしではもはや完全ではなくなった。」Christoph Gerlach: Das Fachsekretariat „Hikaru no Go" berichtet…. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft1, S.46-47, hier S.47.　この記事においてゲルラッハは「2002 年 2 月 23 日」と述べているが、既に引用した『ドイツ碁新聞』2002 年第 2 号の、アニメマラソンに関するヘープザッカーの記事には「3 月 22 日から 24 日」と報告されている。ただしゲルラッハは『ドイツ碁新聞』2002 年第 2 号の報告を参照するよう指示しているので、彼が言及したアニメマラソンが 3 月 22 日から 24 日に行われたものであることは明らかである。Vgl. Ebd.
[34] 2002 年、コブレンツの「アニマジック」（AnimagiC）への訪問者数が 3000 から 4500 であったことが『ドイツ碁新聞』2002 年第 3 号において報告されている。Vgl. Christoph Gerlach: AnimagiC 2002. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft3, S.8, 44, hier S.8.　また、この当時のアニメコンベンション訪問者数は、フォーラムにおいてもゲルラッハによって述べられており、2003 年のベルリン

な会場で行われるアニメコンベンションにおいてワークショップを続けていくことになり、2004 年にはライプツィヒ見本市への参加も開始された。そもそもライプツィヒ見本市には伝統的に大きなコミックの領域があり、そこではマンガ及び日本文化全般が紹介されていたのであるが、有限会社ライプツィヒ見本市がアニメコンベンションを見て回り、囲碁及びドイツ碁連盟の活動に注目したことから、連盟と見本市の会談となった。そして約 1 年間の準備の後に、見本市会場での囲碁普及が実現されることになった[35]。

ライプツィヒ見本市でのワークショップについては、『ドイツ碁新聞』のみならず、ドイツ碁連盟ホームページ内のフォーラムにおいても予告が掲載された[36]。2004 年 2 月 27 日、ゲルラッハは約 1 か月後に迫ったこのイベントについて、「ライプツィヒ見本市において今年、大きな囲碁ブース（90 ㎡）が設置され、ドイツ碁連盟は毎日、ライプツィヒの囲碁グループの協力の下、現地の援助者たち 10 人と共にそこにいるだろう」と述べ、見本市の公式プログラムを引用した。それによると、囲碁のワークショップは 4 日間、毎日 10 時から 18 時まで開催され、特別な催しも用意されていた。2004 年 3 月 25 日（木）、及び 26 日（金）の 10 時 30 分から 14 時には、ゲルラッハによって「学級及びグループのための囲碁の手ほどき（10 から 30 人）」が行われ、3 月 27 日（土）の 10 時 30 分からはゲルラッハとゲストたちによって討論が行われるという予定であった。討論のタイトルは「私たちは囲碁ができれば、アジアの人々をよりよく理解できるのか」であり、この日は 15 時から 17 時まで、ドイツのトッププレーヤーたちと多面打ちによって対局することもできた[37]。そして 3 月 28 日（日）の 13 時から 16 時には、初心者のための大会と経験者のための大会が 9 路盤において行われることになっており、賞品は木製の碁盤とガラス製の碁石、並びに入門書であった[38]。

『ドイツ碁新聞』2004 年第 2 号には、ライプツィヒ見本市での活動報告が掲載された。この報告からわかることは、囲碁のワークショップに予想以上の客が訪れたということである:

多くの訪問者たちが来るだろうと、既に私たちは心の準備をしていたが、とりわけ土曜

の「メガ・マンガ・コンベンション」（Mega Manga Convention）には 1000 以上、2004 年のアニマジックには数千とされている。Vgl. http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=54.0, Go auf der MMC (31.10.-2.11.2003), Christoph Gerlach, 7.10.2003 11:58. / http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=725.0, Go auf der AnimagiC, Koblenz (23.-25.7.2004), Christoph Gerlach, 25.06.2004 09:46.

[35] Christoph Gerlach: Go auf der Leipziger Buchmesse. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft2, S.56-57, hier S.56.

[36]『ドイツ碁新聞』2004 年第 1 号には次のような予告が掲載された。「今年、この専門事務局はこれまでに、8 つのコンベンションにおける囲碁ワークショップを取り決めた：［…］ライプツィヒ見本市が特別なハイライトとなるだろう。そこで私たちは約 90 ㎡の大ブースを手にし、4 日間、学級及び当日客に、囲碁に馴染んでもらうだろう。パネルディスカッション、多面打ち、そして初心者の大会も大綱的プログラムに含まれている。」Vgl. Gerlach: Das Fachsekretariat „Hikaru no Go“ berichtet…, S.47.

[37] http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=457.0, Go auf der Leipziger Buchmesse (25.-28.3.2004), Christoph Gerlach, 27.02.2004 11:26. ゲルラッハの他、ベンヤミン・トイバー（Benjamin Teuber）とマルコ・フィルンハーバー（Marco Firnhaber）がこの見本市に居合わせた。当時、ゲルラッハは六段、残りの 2 人は五段であった。Vgl. Ebd.

[38] Ebd.

> の殺到はあわや私たちを突き倒すところだった。私たちは興味を抱く者たちをグループ毎に「あとの方がきっとより空いている」と言ってなだめなくてはならなかった。テーブルの列の間の通路に、既にスペースがほとんどなかったからである。例えば1時間毎に行われるデモ盤での囲碁入門によって、私たちは来年、より多くの人々の受け入れを計画しなくてはならない。そしてその場合には、私たちはマイクとアンプも手元に置く。［…］明らかに私たちのブースを目指してきた訪問者たちを、私たちは再び失望させるつもりはない。[39]

このような 2004 年のライプツィヒ見本市でのワークショップの経験及び反省、とりわけ数多くの客を相手とした指導を可能にする「デモ盤での囲碁入門」という発想は、実際に 2005 年の同見本市での活動に取り入れられた。ゲルラッハは 2005 年 1 月 10 日、「ドイツ碁連盟は 2004 年に続き、2005 年のライプツィヒ見本市にも大ブース（90 ㎡）を用いて参加することを誇りに思う」という予告をスレッドに掲載した[40]。そして 2005 年 1 月 26 日には、この年のライプツィヒ見本市のプログラムが同スレッドに掲載された。このプログラムを見ると、全体として前年の活動とほぼ変わらないものの、最も大きな変更として、2005 年 3 月 17 日（木）から 20 日（日）までの毎日、一定の時間がデモ盤での囲碁の手ほどきに充てられていることに気付かされる。例えば木曜及び金曜には 15 時及び 16 時にデモ盤での囲碁の手ほどきが 15 分間で行われ、「非常に素早く囲碁の基本ルールを学びたい者たち皆に理想的」とされている[41]。このことは『ドイツ碁新聞』2005 年第 3 号における報告でも次のように言及されている：

> 木曜及び金曜の学級のための手ほどき、毎日の賞品付き問題、そして日曜の 9 路盤囲碁大会に、30 分で行われるデモ盤での高速囲碁入門が加わった。囲碁に興味を抱く全ての訪問者たちが、私たちのブースを通過していくことは、それによって可能となった。これに対し私たちは昨年、空間不足のせいで何人かをなだめなくてはならなかった。[42]

前年に続き、2005 年のワークショップにも非常に多くの訪問客が押し寄せ、「とりわけ土曜には、休憩のための自由時間が協力者たちにほとんどなかった」と報告されている。「常に新たな訪問者たちがこのブースへと迫り」、「全てのテーブルと椅子が占められた際には、即座に床も碁盤となった」というほどの大盛況だったのである[43]。

4. ハンス・ピーチュと青少年促進

---

[39] Gerlach: Go auf der Leipziger Buchmesse, S.56-57.
[40] http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1249.0, Go auf der Leipziger Buchmesse (17.-20.3.2005), Christoph Gerlach, 10.01.2005 14:35.
[41] Ebd., Christoph Gerlach, 26.01.2005 11:01.
[42] Christoph Gerlach: Go auf der Leipziger Buchmesse. In: Deutsche Go-Zeitung (2005), Heft3, S.18-19, hier S.18.
[43] Ebd.

アニメコンベンションにおいて囲碁が紹介され、とりわけ若者たちの間で囲碁への関心が高まりつつあった頃、囲碁に関わる者たち皆を悲しませる事件が起こった。2003 年 1 月 16 日、日本棋院の囲碁促進巡業のためにグアテマラを訪れていた、34 歳のドイツ人囲碁プロ棋士ハンス・ピーチュ（Hans Pietsch 1968-2003）が、武装強盗の襲撃の犠牲となった。「ドイツ囲碁界はこれにより、全ヨーロッパの多くの囲碁プレーヤーたちにとって重要な日本への仲介者であり、ドイツの多くの人々にとって良き友であった卓越した代表者を失った」[44]。この事件を受け、『ドイツ碁新聞』2003 年第 1 号はピーチュの追悼号の様相を呈し、彼に関する記事が多数掲載された。それらのうち、ドイツ碁連盟幹部による記事には、ピーチュの経歴が簡潔に述べられている。1984 年 2 月に初めて、ブレーメンの対局の夕べを初心者として訪れた彼は、1985 年 9 月、ブレーメンマイスターシャフトで優勝し、1986 年 2 月には青少年世界マイスターシャフトの代表となった。そして 1988 年の「ヨーロッパ碁コングレス」（European Go Congress）では 6 位に、同年 12 月にはドイツマイスターシャフトで優勝した。1990 年 9 月、ピーチュはプロになるべく小林千寿の弟子として日本棋院の院生となり、1997 年にドイツ人初のプロ棋士となった。2000 年に四段となっていた彼の死後、六段が与えられた。ピーチュは院生の世界を一時期経験したベンヤミン・トイバー（Benjamin Teuber）等、若いヨーロッパのトッププレーヤーたちの指導者の役割も果たした[45]。

グアテマラでの事件後、「ピーチュ夫妻と小林千寿氏との密な協力の下、ハンスに敬意を表す大会を毎年開催することをドイツ碁連盟は決定した」[46]。『ドイツ碁新聞』2003 年第 3 号には、この大会のために設けられた基金について次のように述べられている：

> とりわけ若いプレーヤーたちがハンスにとって大切であったように、青少年のための大会であるべきだ。この毎年の催しはハンス・ピーチュ基金によって出資される。この基金はドイツ碁連盟によって管理されるが、お金は［…］この毎年の青少年大会のための

---

[44] http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Januar 2003.

[45] Der Vorstand des DGoB: Hans Pietsch. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft1, S.3. 『ドイツ碁新聞』2003 年第 1 号にはこの記事に続き、1984 年から 1990 年の間にブレーメンの囲碁雑誌『ヴィントミューレキ』（Windmühleki）に掲載されたピーチュについての記事が引用されており、それらには彼の非凡さが示されている。ここでは 1989 年の記事の 1 つを紹介したい。「1984 年 2 月 7 日、ハンスは初めてヴェザーテラッセンに足を踏み入れた。彼の最初の 2 回の対局の夕べにおいて、私は 11 路盤でテスト対局を 4 局行った。それは 6 子の置き碁で始まった。対局毎に、私は置石を 1 子ずつ劇的に素早く減らさなくてはならなかった。というのもハンスは最初の 3 局を投了という形で明確に勝利したからである。ようやく第 4 局（3 子の置き碁）において、私は 3 目差でかろうじて彼をくい止めることができた。ハンスは十四級に格付けされた。［…］続く 14 か月間、ハンスの棋力は 1 か月毎に一級上昇した。1985 年のハノーファー見本市大会の際、彼は初段の壁を突破した。既に彼の囲碁初年度に、私は『ドイツ碁新聞』のためのブレーメンに関する記事において、ハンスの才能への注意を喚起した。そして『ブレーメンの秀策の生まれ変わり』について理由なく語ったのではなかった。［…］しかし当時、高段者たちの中に、このことを真に受ける者は誰もいなかった。」Vgl. Steffi Hebsacker: Hans Pietsch aus Bremer Sicht. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft1, S.4-9, hier S.8-9. また、ブレーメンの対局の夕べの 1 つが「ビュルガーハウス・ヴェザーテラッセン」（Bürgerhaus Weserterrassen）において行われている。Vgl. https://www.go-lv-bremen.de/sites/spieleabende

[46] Martin Stiassny: Hans Pietsch Fond. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft3, S.3.

みに利用される。
この基金の当初の資本は多くの寄付者たち、とりわけピーチュ家の友人たちによって出資された。
囲碁に夢中になっている青少年たちのために何かを行いたい者は、ここに可能性がある:
私たちは次の口座に寄付を願う：[…]
私たちは皆、きっとハンスを忘れないだろう。そしてあなたたちの支援によってハンス・ピーチュ・メモリアルを、ドイツ囲碁界の確固たる構成要素として、長年経た後にもなお実施したい！[47]

『ドイツ碁新聞』同号にはこの大会についてのさらなる情報も掲載されており、第1回ハンス・ピーチュ・メモリアルは2003年9月に行われる予定であること、そして『ヒカルの碁』に倣い、学校対抗囲碁大会が予定されていることが告げられた。また、この大会の計画は学校囲碁専門事務局長クレメンス・ヴィンクルマイアー(Clemens Winklmaier)の協力の下、シュテッフィ・ヘープザッカー（Steffi Hebsacker）が引き受けることとなった[48]。

ハンス・ピーチュ基金のお金で「毎年ハンスの誕生日に行われる催しを支援する」というピーチュ家と小林千寿の願望どおり、2003年9月27／28日、ブレーメンの武道クラブの道場において第1回ハンス・ピーチュ・メモリアルが実施された。この大会の報告は『ドイツ碁新聞』2003年第5号に掲載されている。先述の通り、この大会は『ヒカルの碁』の学校対抗戦の形式に倣って行われ、さらに、賞品としてヒカルのしおりやヒカルのパンツ等が用意されているくじ引きも行われた[49]。子供たちにとって非常に魅力的な大会であったに違いない。その上、この大会の「勝利チームの第1碁盤のプレーヤーを、ハンス・ピーチュの囲碁の先生であった小林覚九段とのインターネット対局が待っている」[50]という、魅力的な申し出が日本棋院からもたらされていた。『ドイツ碁新聞』2003年第5号にも、この大会の報告に続いて次のような記事が掲載されている：

ブレーメンでの第1回ハンス・ピーチュ・メモリアルを機に、日本棋院は親切にも、ハンス・ピーチュの師であった小林覚プロ九段と勝利チームの最強プレーヤーとのオンライン指導碁を組織する用意があることを表明した。11歳で十級、ノルダーシュテットのコペルニクス・ギムナジウムのフィン・バッハマンがこの特別対局を行うという大きな

---

[47] Ebd.
[48] Thomas Kettenring: Delegiertenversammlung in München. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft3, S.3-4, hier S.3.　ノーアに代わりヴィンクルマイアーが学校囲碁専門事務局長に就任したことは、『通達 2003 年 1 月』に報告されている。Vgl. http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Januar 2003.　また、『通達 2003 年 5／6 月』における報告から、ヴィンクルマイアーによって既に考案されていたドイツ学校囲碁マイスターシャフトが、ハンス・ピーチュ・メモリアルの大会形式の土台となったことがわかる。Vgl. http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben Mai/Juni 2003.
[49] Horst Timm: Hans Pietsch Memorial. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft5, S.13-17.
[50] http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=42.0, DGoB-Vorstandsrundschreiben 09/2003, DGoB-Vorstand, 20.09.2003 17:49.

栄誉を手にしている。期日は 10 月 18 日の 12 時頃の見込みである。[51]

このバッハマン対小林も予定通りに実現され、ドイツ碁連盟構成員たちの注目を集めた[52]。

このようにして、プロになってからも「青少年の促進を決して見失わなかった」[53]というピーチュの遺志を受け継ぐ大会が設立された。そして 2004 年 1 月 16 日の彼の一周忌が近付く中、1 月 9 日に社団法人 go4school が創設された。この社団法人の目的について「社団法人 go4school の規約」（Satzung des ‚go4school e.V.‘）には次のように述べられている：

（1）［…］この社団法人の目的は、子供たち、青少年たち、そして成人して間もない者たちの助成であり、とりわけ
・自らに責任を持ち、連帯する能力のある人物への成長
・独自の思考と行動によって、社会的環境を積極的に共同形成する能力
・他の文化を有する人々及びその文化財への理解と関心
の助成である。
（2）この規約の目的はとりわけ
・子供及び青少年向けのあらゆる種類の施設における囲碁（戦略ボードゲーム）提供の構築及び組織化
・個人的、専門的成長状況に合致する限りにおいて、子供たち、青少年たち、そして成人して間もない者たちに、自らに対する責任感及び他者に対する責任感を徐々に育むこと
・例えば対局用具、囲碁教材、子供及び青少年向け囲碁文献を作成し、自由に使用してもらうことによって、あるいは必要な資金によって、これらの集団を支援すること
・子供たち及び青少年たちの出会いを生み出すこと（授業、大会、余暇、及びその他）
・この社団法人の計画実行に適した人々を教育し、資格を与えること
によって実現される。[54]

---

[51] Steffi Hebsacker: Ankündigung: Deutscher Schüler spielt gegen jap. Top-Profi. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft5, S.17.　ハンディキャップシステムが採られていたこともあり、棋力で勝るチームが必ず勝利するというわけではなかった。Vgl. Timm: Hans Pietsch Memorial, S.15.　また、バッハマンは指導碁時には七級となっていた。Vgl. http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=116.0 (20), Hans Pietsch Memorial & Bachmann vs. Kobayashi, Tobias Berben, 16.10.2003 14:28.

[52] この指導碁は 9 子の置き碁で行われ、結果はバッハマンの勝利となった。この結果に関して、バッハマンの勝利を称賛する投稿がスレッド上に投げかけられた一方、次のような意見も述べられた。「もしプロが本当にそのつもりだったならば、フィンは抵抗できずに敗れたことだろう。しかしそれは『美しい』対局ではなかっただろう。［…］私はアマ初段たちが 9 子の置き碁でプロ九段たちに敗れるのを既に見てきた。それは指導碁であり、それ以上でもそれ以下でもなかった。そこから『勝利』という言葉を導き出すことは適切でないと私は思う。」Vgl. Ebd., Thomas Schmid, 20.10.2003 17:21.

[53] Timm: Hans Pietsch Memorial, S.13.

[54] https://www.go4school.de/

社団法人 go4school の設立はドイツ碁連盟の活動にも影響を及ぼした。『幹部通達 2004 年 6／7 月』においては、それまでクロルが担当していた「促進及び公益性専門事務局」（Fachsekretariat Förderung und Gemeinnützigkeit）の解消が伝えられた。「社団法人 go4school の創設により、ドイツ碁連盟はこの分野での活動をさしあたり中止したい」というのが解消の理由であった。ただし、それと同時に「go4school 専門事務局」（Fachsekretariat go4school）が新たに設けられ、クロルがその局長を担当することも報告された。「ドイツ碁連盟は社団法人 go4school の構成員となることを申請した」のであり、彼はこの社団法人とのコンタクトに取り組むことになった[55]。

『ドイツ碁新聞』2004 年第 1 号及び第 3 号における記事から、ハンス・ピーチュ・メモリアルの支援が社団法人 go4school の視野にあったことは明らかで[56]、事実 go4school は、2004 年 9 月 25／26 日にベルリンのノイケルンにあるフランツ・シューベルト小学校で行われた第 2 回ハンス・ピーチュ・メモリアルを、資金面で支援した[57]。そして『ドイツ碁新聞』2004 年第 4 号には、フランクフルトでの代表者会議における決定事項として、翌年からこの社団法人がハンス・ピーチュ・メモリアルを組織することが報告された[58]。この点に関し、『幹部通達 2005 年 2 月』には go4school 側の議決について、次のような報告が掲載されている：

> 2005 年からハンス・ピーチュ・メモリアルを実行することを、社団法人 go4school は 2005 年 1 月 14 日の構成員会議において議決した。これにより、今までドイツ碁連盟が手にしていたハンス・ピーチュ・メモリアルのための資金を、この社団法人が受け取る。[59]

このようにして、ハンス・ピーチュ・メモリアルは、2005 年からこの社団法人によって運営されることになった。

5. ドイツの院生たち

第 1 回ハンス・ピーチュ・メモリアルが行われてから間もなく、ドイツの青少年囲碁プレーヤーたちを助成するためのさらなるアイデアが、スレッド上に投げかけられた。2003 年 10 月 14 日、日本棋院の院生として当時日本に滞在していたトイバーが、「青少年促進」というスレッドを次のような投稿で開始したのである：

> ここ日本で院生となって以来、私はドイツに戻ってから才能促進プログラムに着手するというアイデアを抱いている。[…]

---

55 http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=783.0, Vorstandsrundschreiben 06-07/2004, DGoB-Vorstand, 15.07.2004 19:28.
56 Harald Kroll: go4school e. V. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft1, S.5-6. / Martin Stiassny: Jugendförderung mit go4school e.V. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft3, S.4-5.
57 Steffi Hebsacker: 2. Hans-Pietsch-Memorial. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft5, S.16-19, hier S.16.
58 Bernhard Kraft: Neues vom DGoB. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft4, S.3-4, hier S.3.
59 http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1304.0 (20), Vorstandsrundschreiben Februar 2005, DGoB-Vorstand, 11.02.2005 22:16.

次世代の才能ある者たちの集団を形成することが重要である。[…]
それから彼らは私によって（そして望まれるのは、他の者たちによっても）特別にトレーニングされ、支援されるだろう。具体的には次の通りである：
・オンライン・リーガで定期的に対局が行われ、その対局にはまた常にコメントが投げかけられる予定である。
・定期的なオンライン教室。[…]
代償として『院生たち』には、学習と強化に向けた定期的な参加及び積極的な努力が期待されるだろう。その上、囲碁の問題あるいは棋譜暗記という形の『宿題』が考えられる。[60]

この提案に対して同日 16 時 27 分、フランツ＝ヨーゼフ・ディックフート（Franz-Josef Dickhut）が協力を申し出た[61]。そして翌日には、シュティアスニーがトイバーの提案に対し、次のように歓迎の声を投げかけた：

次世代促進のテーマを引き受けるという君の申し出を、ドイツ碁連盟の幹部は歓迎する。ドイツ碁連盟の幹部として、私たちがこのプロジェクトの成功にどのように貢献できるか、私たちは E メールでの対話によって直接話し合うべきだろう。
君の提案がポジティブに評価され、君が支援を頼りにすることができるということを、これまでのフォーラムの全投稿が君に伝えている。ドイツ碁連盟の幹部はこれに無条件で同調することができる。君は比較的長い期間を要するプロジェクトを計画しているようなので、支援の可能性を討論するために、私たちが幹部内でもう少し時間を必要とするということを、君はきっとわかってくれるだろう。
つまり問題は、私たちに助力する意志があるかどうかではなく、どのように私たちが成功に貢献することができるかである。[62]

このように、トイバーの提案には連盟による支援が約束された。そして『ドイツ碁新聞』2003 年第 6 号には、ディックフートによる「ドイツの院生たち？」という記事が掲載された。この記事においては、院生システムの具体的構想が早速開始されたことを確認できる。彼は構想中のドイツの院生システムについて、次のように述べている：

2004 年初め、十分な関心があれば、才能ある青少年囲碁プレーヤーたちの促進に向けた一種の院生システムがドイツに生まれることになっている。[…]
『教育』はベンヤミン・トイバー五段と FJ・ディックフート六段の指導の下で行われる。

[60] http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=98.0, Jugendfoerderung, Benjamin Teuber, 14.10.2003 15:06.
[61] Ebd., FJ, 14.10.2003 16:27. ディックフートについては次の文献を参照。杉浦（2019），4 頁。
[62] Ebd., DGoB-Vorstand, 15.10.2003 10:19.

［…］
まず私たちは、棋力によって区分された 2 つのリーガを設けるつもりである。そして対局は KGS（棋聖堂碁サーバー）上で行われ、コメントも加えられる。［…］
しかしここで、最初はまだ絶対的なものではないものの、アジアにおいてと同様、候補者たちに年齢制限及び要求される棋力が設けられるだろう：
11 歳まで：少なくとも八級
12 から 13 歳：少なくとも五級
14 から 15 歳：少なくとも二級
16 から 17 歳：少なくとも初段[63]

トイバーとディックフートによる院生システムに対し、「十分な関心」があったことは確かである。というのも、『ドイツ碁新聞』2004 年第 2 号において「現在、ドイツにも院生たちがいる」[64]と述べられ、ドイツに誕生した院生システムについての次のような報告が掲載されているからである：

このプロジェクトはフランツ＝ヨーゼフ・ディックフート先生とベンヤミン・トイバー先生によって作られた。16 人の若い囲碁プレーヤーたちが応募した。そのうちの 2 人は遅すぎたため、自らを院生と称してよいのは、現在 14 人である。3 か月間の試験的期間が 2004 年 3 月 1 日に始まった。［…］
KGS 上に『院生道場 DE』という内輪の空間が開かれた。リーガ対局を行い、対局を分析し、ほぼ毎日詰碁問題を解き、暗記している棋譜を交換し、そしてもちろん待望の先生たちによる講義（週に 4 回）を受けてものにするために、この道場で全ての生徒たちと先生たちが会う。［…］
このプログラムを継続することが計画されている。[65]

この記事から明らかなのは、試験的な第 1 期目のドイツの院生システムにおいて、青少年の棋力向上に向けた様々な活動が行われたということである。そして、この記事にはさらに「平均的な生徒は 1 日に約 2 時間、この院生プロジェクトに取り組んでおり、それにより、たった 4 週間後の今、既にたいていの院生たちは明白な能力の向上に気付くことができた」[66]と述べられている。つまり 1 か月足らずのうちに、当初の目的を果たすことができるシステムであることが示されたのである。

ところで、このドイツの院生システムの中でとりわけ注目を集めたのはリーガ対局であったようで、2004 年 3 月 30 日、ディックフートが「ドイツ院生リーガ」というスレッドを次

[63] FJ Dickhut: Inseis in Deutschland? In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft6, S.9.　KGS については次の文献を参照。杉浦（2018），129－130 頁。
[64] Manuela Lindemeyer: Inseis in Deutschland. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft2, S.3.
[65] Ebd.
[66] Ebd.

のような説明で開始した：

> 『院生』という概念は（まだ）少し過大評価かもしれないが、いつの間にか KGS 上で第 1 回ドイツ院生リーガの第 1 シーズンが進行している。
> それは厳密に捉えると、ドイツ碁連盟の次世代ホープたち 14 人がポイントを巡って争う 2 つのリーガである。
> そこで行われる対局はベンヤミン・トイバーと私によってコメントされ、その上さらなる講義や囲碁の問題などがある。[67]

このスレッドにおいては、ドイツにおいて開始された院生システムを称賛する意見が数多く投げかけられたが、同時にまた、質問や要求も投稿され、既にディックフートによるスレッド開始直後、「対局を（あるいはより適切に言い換えると：それに続く君たちの検討も）覗いて見ることはできるのか」という問いが投げかけられた[68]。これに対する同日 21 時 6 分のディックフートの回答には、ドイツ院生リーガの当初のコンセプトと同時に、投げかけられた意見を考慮する姿勢が表れている：

> 今のところエリートたちの内輪のクラブ空間である。なぜなら参加者たちはいくらか支払いもしたのだから。来シーズンに向けて、ひょっとすると入場と引き換えの観覧席チケットのようなものを考えるかもしれない。[69]

トイバーとディックフートによるこの活動を、エリートたちのみに向けたものにとどめず、より多くの囲碁プレーヤーたちが利用できる活動とすることを望む声は、さらに投げかけられ、2004 年 3 月 31 日には、「ドイツ杯専門事務局」（Fachsekretariat Deutschlandpokal）の局長ベルント・グラムリッヒ（Bernd Gramlich）が院生のリーガ対局の棋譜に関して次のような投稿をした：

> 君たちは棋譜の中にコメントを書いているのか。もしそうであれば、君はそれらの棋譜の予約購読のために価格を定めることができる。そうすれば、大人になってようやく囲碁をしっかり学ぶという不運を抱えた人々にも、君たちの活動から得るものがある。[70]

このような意見を受けたトイバーは、要求に寄り添う姿勢を示し、2004 年 4 月 8 日、「コメント、問題等のために少し出費することにも、君たちは用意があるのだろうか」[71]と問いかけた。これに対して同日 11 時 34 分、「はい」という回答と共に、そのようなシステム変更に

---

[67] http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=516.0 (60), Deutsche Insei-Liga, FJ, 30.03.2004 12:17.
[68] Ebd., Skyr, 30.03.2004 12:46.
[69] Ebd., FJ, 30.03.2004 21:06.
[70] Ebd., Bernd Gramlich, 31.03.2004 10:27.
[71] Ebd., Benjamin Teuber, 8.04.2004 09:05.

よって、院生システムがトッププレーヤーたちだけでなく、大衆レベルのプレーヤーたちの促進にもなりうるという考えが述べられた[72]。

2004 年 9 月 13 日、トイバーは 10 月から開始される院生システムの第 2 シーズンについての予告をスレッドに掲載した。この予告においては、上述のスレッドでの討論で言及された点のうち、「コメント」に関しては触れられていないものの、「観覧席チケットのようなもの」と囲碁の「問題」の販売という点においてトイバーたちが院生システムに変更を加えたことを見て取ることができる：

> 10 月 1 日に院生の学校の次のクールが始まる。[…]
> 今回は 24 人の若く才能あるプレーヤーたちが […] ドイツのトッププレーヤーたちと共に自らの対局を分析するために、毎週 4 つのリーガにおいて KGS 上で対局する。その上、今や週に約 50 題の囲碁の問題があり、棋力に応じて易しい問題（六級以下）、中級の問題（二から五級）、あるいは難しい問題（一級以上）を解かなくてはならない。[…]
> 参加費：
> 18 歳未満の院生　30 ユーロ
> 18 歳以上の院生　40 ユーロ
> 全ての講義（約 48 回！）のための観客券　15 ユーロ
> 囲碁の問題への参加のみ […]　15 ユーロ
> 観客券と問題　25 ユーロ […]
> したがって、院生として受け入れられなくても、学びに関心のある者は誰でも、何歳でも講義を見ることができ、詰碁のトレーニングから利益を得ることができるということも新しい。[73]

当初エリート育成を目指していた院生システムであったが、早くも第 2 シーズンから、院生になれない者たちも観客として参加することができることとなったのである。もちろん院生システムはあくまで院生を重視しており、2004 年 9 月 17 日、トイバーは観客券の利用に関して、「時々質問あるいはコメントを差しはさむのは OK であるが、[…] 全体としては院生のために […] たいていはむしろ少し控えめにしていること」を求めている[74]。しかし、もともとエリート育成のための場として開始された院生システムにとってこの変更は、根本的な方針転換だったと言える。

---

[72] Ebd., bachkiesel, 8.04.2004 11:34.　このような提案の他、院生システムにおいて金銭を徴収することへの批判も投げかけられたが、院生システムは第 2 シーズン以降も参加費を徴収して行われた。

[73] http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=946.0 (60), Deutsche Insei-Schule startet in die zweite Runde!, Benjamin Teuber, 13.09.2004 17:35.　ディックフート（六段）とトイバー（六段）の他に、ベルント・ラートマッヒャー（Bernd Radmacher 五段）とシュテファン・カイチーク（Stefan Kaitschik 四段）が先生として予定されていた。Vgl. Ebd.

[74] Ebd., Benjamin Teuber, 17.09.2004 21:17.

ところで肝心の申込者たちはどれほどいたのだろう。この点については、上述の第 2 シーズンについての予告から 2 週間後の 2004 年 9 月 27 日、トイバーが更なる投稿をしている。彼は「36 人の院生応募者がおり、24 件の観客への申し込み及び／あるいは問題への申し込みがあった」こと、そして「選抜が容易ではなかったので、院生は 24 人ではなく今や 26 人となるだろう」ことを告げ、「非常に多くの申し込みに驚き、感激している」旨をここで報告した[75]。第 1 期目の 16 人からの飛躍的な応募者数の増加には、このシステムへの関心、さらには当時のドイツにおける囲碁への関心の度合いが反映されていたと言えるだろう。

6. おわりに

本稿冒頭においても述べた通り、『ヒカルの碁』はドイツにおける囲碁普及、とりわけ若者たちへの囲碁普及に大きな役割を果たした。その来独前後の頃、ドイツ碁連盟による複数の活動の中に『ヒカルの碁』との関連が見出されることは、本稿で確認してきたとおりである。若者たちに向けた新たな活動が次第に活発に行われるようになり[76]、「ドイツ囲碁史研究（1）」において述べた通り、青少年たちを中心に連盟構成員数が増加した[77]。また、これらの活動の直後に開始された囲碁のブンデスリーガも、『ヒカルの碁』によって生み出された機運がその推進力となっていたと言える。ドイツ囲碁界のポジティブな方向への変化が実感される中、若者たちだけでなく「大人の囲碁プレーヤーたちのためにもすばらしい催しを行うチャンス」という意識の下でブンデスリーガは準備、そして実施されたのであった[78]。今後はブンデスリーガ、そして本稿で確認した連盟による複数の活動の、その後の展開に注目しながらドイツの現代囲碁史を捉えていくことが 1 つの課題となる。

しかし、調査する時代を現在に近付けていくこの課題に並び、さらに時代を遡る研究が必要であることも見えてくる。本稿第 2 章において述べた通り、学校での囲碁普及が目標として掲げられ、そのための専門事務局が創設された 2001 年、若者たちに囲碁を広めるための活動は実際に本格化した。これらの活動は即座に成果を生み出したわけではないが、青少年た

---

[75] Ebd., Benjamin Teuber, 27.09.2004 12:20. 『ドイツ碁新聞』2004 年第 5 号においては、第 2 シーズンが「26 人の院生たち及びさらなる 28 人の参加者たち」で開始されたと報告されている。Vgl. Christian Wenzel: Insei-Schule mit Website. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft5, S.2.

[76] 当時、「碁少年優勝杯 2003」（Go-Kids-Pokal 2003）と「碁 10 代優勝杯 2003」（Go-Teens-Pokal 2003）も開始され、『ドイツ碁新聞』2002 年第 6 号に両優勝杯の公示が掲載された。前者に参加できるのは 2002 年 12 月 31 日に 12 歳未満の者、後者に参加できるのは 2003 年 1 月 1 日に 12 歳以上 18 歳未満の者という違いがあるのみで、その他の点において両優勝杯の公示は同一である。参加者たちは通常の大会及びそれに付随する 9 路盤、13 路盤の大会、あるいは少年向け大会、10 代向け大会においてポイントを集める。各大会において、全敗の者には 1 ポイント，1 勝以上したが勝率 50%以下の者には 2 ポイント、勝率が 50%を超えるが 100%未満の者には 3 ポイント、全勝の者には 4 ポイントが与えられる。そして年間ポイントの合計により順位が決定され、優勝者にはディックフートによる 2 時間の個人授業と要望があれば 100 ユーロ、2 位、3 位にはそれぞれ 50 ユーロ、30 ユーロ、そして 4 位から 20 位にはプロ棋士のサイン入り扇子が与えられる。Vgl. Go-Kids-Pokal 2003. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft6, S.8. / Go-Teens-Pokal 2003. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft6, S.8.

[77] 杉浦（2018），129 頁。

[78] 同上，130 頁。

ちへの囲碁普及の土台は着実に構築されていたと捉えることができるだろう。そもそもそのような土台のない情況に『ヒカルの碁』が登場しても、ドイツ囲碁界がそれを囲碁普及活動に取り入れたかどうかは疑わしい。ただしここで着目したいのは、2001 年にまで遡りドイツ碁連盟の活動を確認する中で、それ以前にも同様の目標の下で若者たちへの囲碁普及活動が行われていたことが視野に入ってくるということである。まず、本稿第 2 章で言及した重野とクロルの活動を『ドイツ碁新聞』で辿っていくと、1997 年第 7＋8 号に掲載された記事にその発端を確認することができる：

> 日本のプロ二段棋士である日本棋院の重野由紀氏が現在ヨーロッパに滞在している。海外の囲碁についての報告を定期的に書くという任務を彼女は負っている。彼女はミラノに住んでいるが、ヨーロッパの国々のみを訪れているのではない。外国／プロの付き添い専門事務局長として、私は今年の初め、時間的に可能であれば一度ドイツにも訪れるよう、既に彼女にお願いした。彼女は［…］基本的には承諾した。［…］
> 彼女は 11 月に時間があるので、ラールシュテットの大会に向けてハンブルクに行くことを、私は彼女に納得してもらうことができた。［…］重野氏は、ドイツにいる日々にも何かすることがほしいと言っているので、ラールシュテット／ハンブルクのために学校への訪問が計画されている。[79]

この計画は実現され、とりわけ学校の子供たちとの活動が中心となり、重野による囲碁入門が 16 のクラスにおいて行われたことが『ドイツ碁新聞』1997 年第 11＋12 号において報告されている[80]。そしてこの活動は継続されることになり、その後も繰り返し『ドイツ碁新聞』に活動報告が掲載された。

また、1997 年 1 月 10 日、エッセンにおいて囲碁コース指導者たち、及び指導者になる予定の者たち 14 人が会合に集まった。その背景となったのは、数年前からドイツ及びその他のヨーロッパの国々において、活動的な囲碁プレーヤーたちの数が少し減少していることであった。そしてこの会合において、「新たな弟子たちの募集のためには、依然として大学及び学校が最善の環境である」ことが確認された[81]。また、この会合では『ヒカルの碁』に先立ち、アンドレアス・フェッケ（Andreas Fecke）の「ストーンズ」（Stones）が成果を上げていることも報告された[82]。ストーンズはフェッケによる碁石のキャラクターのマンガで、1995 年から『ドイツ碁新聞』に掲載されている。1997 年、ストーンズはゲルラッハにより 1 冊の本として出版された[83]。

---

[79] Harald Kroll: Go-News: Teaching und Promotion. In: Deutsche Go-Zeitung (1997), Heft7＋8, S.56-59, hier S.57.
[80] Anonymus: „Teaching Go Through Germany Tour 1997“. In: Deutsche Go-Zeitung (1997), Heft11＋12, S.7-8, hier S.7.
[81] Ralf Kistermann: Kursleitertreffen, 10. Januar 1997, Essen. In: Deutsche Go-Zeitung (1997), Heft1＋2, S.36-38, hier S.36.
[82] Ebd., S.37.　フェッケについては次の文献を参照。杉浦（2019），18 頁。
[83] https://senseis.xmp.net/?StonesComic / https://www.cgerlach.de/go/stones.html

さらに 1997 年にはノーアの提案により、学級のための対局用具一式、つまり 9 路盤×15、ルール説明書×30 及び十分な数の碁石を備えた箱型カバン 19 個が作られた。それらのうち、既に 18 個が興味を抱く学校に引き渡されたことが『ドイツ碁新聞』1997 年第 3＋4 号において報告された[84]。その後、この囲碁セットがさらに 20 セット作られ、先生たちに配られたことが、『ドイツ碁新聞』2001 年第 6 号において報告されている[85]。

つまり、2001 年のシュティアスニーによる宣言を待たずして、学校はドイツ碁連盟の射程に収められていたのである。したがって、20 世紀末のこれらの活動をより詳細に捉え直し、それらがどのような成果を上げたのかを分析することで、『ヒカルの碁』へと続く青少年たちへの囲碁普及の道筋が示されるはずである。そして 20 世紀末にまで視野を広げるのなら、本稿で見てきた連盟の多くの活動を可能ならしめたインターネット碁の出現という観点からも、ドイツ囲碁史を論述することができるようになるだろう。

年表[86]

年	月	日	
2001			『ドイツ碁新聞』2001 年第 1 号（正確な発行日は不明）において、学校及び大学での囲碁普及がこの年の重点活動の 1 つとして掲げられる。②
	2		「学校における囲碁」専門事務局の設置が宣言される。②
	5		「学校における囲碁」専門事務局の局長にトーマス・ノーアが就任。②
	6		「マウスの番組」での囲碁紹介の予告。②
	6	16	ダームシュタットでの代表者会議において「子供たちへの宣伝活動新聞」プロジェクトが議決される。②
	9	10-14	ザクセンのギムナジウムでのプロジェクト週間で、イェンス・フレーリッヒが囲碁コースを提供。②
2002	3	22-24	ハンブルクの「アニメマラソン」での囲碁ワークショップ。この後、様々なアニメコンベンションで囲碁ワークショップが実施される。③
	4	19	ハノーファーでの代表者会議において『ヒカルの碁』プロジェクトが議決される。③
	5	初旬	ヴィリー・ブラント総合学校でアニメ『ヒカルの碁』の上映。①
	9	8-14	「マウスの番組」での囲碁紹介。②
2003	1	16	ハンス・ピーチュがグアテマラで武装強盗の襲撃の犠牲となる。④
	2		クリストーフ・ゲルラッハが「ヒカルの碁専門事務局」の局長に就任。③

[84] Anonymus: Go-Koffer für Schulen. In: Deutsche Go-Zeitung (1997), Heft3＋4, S.6.

[85] Stiassny: Rückblick 2001, S.3.　この囲碁セットに大きな需要があったため、さらなる 20 セットの追加生産が行われること、そして学校の囲碁クラブの先生たちがこのセットを自由に利用できることが『通達 2002 年 11 月』において報告されている。Vgl. http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm, Rundschreiben November 2002.

[86] 本稿で言及された出来事のうち、主なものを年表にまとめたので参照されたい。なお、各出来事の叙述後に付随されている数字は、その出来事が本稿の第何章で言及されたかを示している。

	9	27-28	第 1 回ハンス・ピーチュ・メモリアル。④
	10	14	ベンヤミン・トイバーがオンライン院生システムを提案。⑤
	10	中旬	カールセン出版の月刊ドイツマンガ雑誌『バンザイ！』第 25 号において、マンガ『ヒカルの碁』の連載がスタート。③
2004	1	9	社団法人 go4school 創設。④
	3	1	オンライン院生システム第 1 シーズン開始。⑤
	3	25-28	ライプツィヒ見本市での囲碁ワークショップ。③
	9	25-26	第 2 回ハンス・ピーチュ・メモリアル。④
	10	1	オンライン院生システム第 2 シーズン開始。⑤
	11		ドイツ碁ブンデスリーガ開幕。
2005	3	17-20	ライプツィヒ見本市での囲碁ワークショップ。③

参考文献

Anonymus: DGoB-Personalien. In: Deutsche Go-Zeitung (2000), Heft11＋12, S.3.

Anonymus: Go-Koffer für Schulen. In: Deutsche Go-Zeitung (1997), Heft3＋4, S.6.

Anonymus: „Teaching Go Through Germany Tour 1997“. In: Deutsche Go-Zeitung (1997), Heft11＋12, S.7-8.

Chamot, Pierre-Alain: Die Maus lernt Go spielen. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft3, S.9-10.

Der Vorstand des DGoB: Hans Pietsch. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft1, S.3.

Dickhut, FJ: Inseis in Deutschland? In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft6, S.9.

Digulla, Jörg / Ebert, Alfred / Fecke, Andreas / Timm, Horst: Das Go-Spiel. Eine Einführung in das asiatische Brettspiel. Hamburg (Hebsacker) 2005.

Fecke, Andreas: Spielemesse Essen. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft5, S.3.

Fröhlich, Jens: Erste Projektwoche in Sachsen. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft5, S.4-5.

Gerlach, Christoph: AnimagiC 2002. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft3, S.8, 44.

Gerlach, Christoph: Das Fachsekretariat „Hikaru no Go“ berichtet…. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft1, S.46-47.

Gerlach, Christoph: Go auf der Leipziger Buchmesse. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft2, S.56-57.

Gerlach, Christoph: Go auf der Leipziger Buchmesse. In: Deutsche Go-Zeitung (2005), Heft3, S.18-19.

Gerlach, Christoph: Hikaru no Go in der „Banzai!“. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft6, S.3.

Go-Kids-Pokal 2003. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft6, S.8.

Go-Teens-Pokal 2003. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft6, S.8.

Hebsacker, Steffi: Anime-Marathon in Hamburg-Bergedorf. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft2, S.5.

Hebsacker, Steffi: Ankündigung: Deutscher Schüler spielt gegen jap. Top-Profi. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft5, S.17.

Hebsacker, Steffi: Hans Pietsch aus Bremer Sicht. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft1, S.4-9.

Hebsacker, Steffi: 2. Hans-Pietsch-Memorial. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft5, S.16-19.

Kettenring, Thomas: Delegiertenversammlung in München. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft3, S.3-4.

Kistermann, Ralf: Kursleitertreffen, 10. Januar 1997, Essen. In: Deutsche Go-Zeitung (1997), Heft1＋2, S.36-38.

Kraft, Bernhard: Neues vom DGoB. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft4, S.3-4.

Kroll, Harald: Go-News: Teaching und Promotion. In: Deutsche Go-Zeitung (1997), Heft7＋8, S.56-59.

Kroll, Harald: go4school e. V. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft1, S.5-6.

Lindemeyer, Manuela: Inseis in Deutschland. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft2, S.3.

Nohr, Thomas: Schulgo & KWAZ. Kinder-Werbe-Aktion-Zeitung. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft3, S.11.

Stiassny, Martin: Delegiertenversammlung Hannover (Teil 1). In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft2, S.4.

Stiassny, Martin: Fachsekretariat „Go an Schulen“ In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft1, S.4.

Stiassny, Martin: Grußwort des Präsidenten. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft1, S.3.

Stiassny, Martin: Hans Pietsch Fond. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft3, S.3.

Stiassny, Martin: Jugendförderung mit go4school e.V. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft3, S.4-5.

Stiassny, Martin: Mitgliederentwicklung. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft1, S.3-4.

Stiassny, Martin: Rückblick 2001. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft6, S.3-4.

Timm, Horst: Go-Mania an der Willy-Brandt-Gesamtschule in Castrop-Rauxel. In: Deutsche Go-Zeitung (2002), Heft3, S.6-7.

Timm, Horst: Hans Pietsch Memorial. In: Deutsche Go-Zeitung (2003), Heft5, S.13-17.

Wenzel, Christian: Insei-Schule mit Website. In: Deutsche Go-Zeitung (2004), Heft5, S.2.

Wiemann, Olaf: Go - Projektwoche Willingen. In: Deutsche Go-Zeitung (2001), Heft3, S.7-8.

財団法人自由時間デザイン協会：レジャー白書 2002（文栄社）2002，44 頁。

酒巻忠雄：「ヒカルの碁」ブームとそのゆくえ［日本棋院『月刊碁ワールド』第 49 巻第 5 号，2002，128－131 頁］。

杉浦康則：現代ドイツの囲碁事情（1）［『独語独文学研究年報』第 45 号，2019 年，1－25 頁］。

杉浦康則：ドイツ囲碁史研究（1）［『独語独文学研究年報』第 44 号，2018 年，127－142 頁］。

渡邉眞依子：ドイツにおけるプロジェクト週間（Projektwoche）に関する一考察［『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部，教育人間科学関連領域，第 56 号，2007 年，143－151 頁］。

http://www.dgob.de/index.htm?dgob/rundschreiben/rund_aktuell.htm

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=42.0

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=54.0

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=98.0

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=116.0

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=457.0

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=516.0

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=725.0

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=783.0

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=946.0

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1249.0

http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=1304.0

https://senseis.xmp.net/?StonesComic

https://www.cgerlach.de/go/stones.html

https://www.go-lv-bremen.de/sites/spieleabende

https://www.go4school.de/

https://www.wdrmaus.de/filme/sachgeschichten/go.php5

執筆者紹介
氏名：杉浦　康則
所属：北海道大学　非常勤講師
Email：ys-hokudai@hotmail.co.jp